

## 事例番号 059 千年蔵のまちづくり(神奈川県小田原市)

### 1. 背景

遺跡や文書等から推定すると、小田原の街は千年以上の歴史を刻んできた(東西の交流軸となる東海道(足柄古道)は八世紀には画定している)。この街が歴史の表舞台に登場するのは、北条早雲に始まる後北条氏(小田原北条氏)の時代(十六世紀)で、関東一円の中心都市としてさまざまななりわいがおおいに栄えた。江戸時代に入っても、天下の嶮と謳われた箱根山を控えた有数の城下町・宿場町として発展し、今日に至る都市の骨格が形成されてきた。

小田原のなりわいの大きな特徴は、さまざまな自然の恵みに手を加え、街道を行き交う人びとにもてなしていた点である。たとえば、海の恵み(蒲鉾、鰹節、塩干)、里の恵み(梅干、漬物、薬、茶)、森の恵み(漆器、指物、寄木)、水の恵み(和菓子、染織、鋳物)などなど。これら製造・販売をあわせて行う老舗は、今日でも数多く残る。さらに箱根・伊豆が近代、国内最大級の観光地に成長すると、小田原のなりわいも卸売りを軸に発展をつづけてきた。

しかし近年、こうした観光地の衰退に現われるような社会変化によって、小田原のなりわいも深刻な打撃を受けている。そこに郊外ショッピングセンターの出店ラッシュ(約 13 万㎡)が加わり、中心市街地の空洞化が一挙に進んだ。目抜き通りのひとつ「お堀端通り」では、公益施設の再配置(県支庁舎や警察署、登記所などの移転)と大型店の撤退(西武百貨店の閉鎖)が重なり、駐車場が無秩序に増え、住民も激減してしまった。

このような環境の激変が続くときだからこそ、足元を見つめなおす必要がある。実際そうした動きが市民と行政の双方から進みつつある。まず、小田原のなりわいの文化に根ざした取り組みが広がってきている(「街かど博物館」や「小田原宿なりわい交流館」など)。また、周囲の状況(観光地の景況など)に全面的に頼らず、自らの手で街を守り育ててゆく気運も芽生えてきた。ちょうどそれは市長の掲げる「人がまちを創り、まちが人を育てる」という理念とも響きあい、さまざまな取り組みが始まっている(小田原銀座商店街の「総務省地域づくり大賞」受賞など)。

### 2. 目標

基本的な戦略は、小田原独自の文化である「なりわい」を、街が再生する指標にすることである。「なりわい」には次のようなプロセスが組み合わさっている。

- ① 地域の自然資源を育てながら活用する
- ② もてなしの心でモノをつくり提供する
- ③ 街で働きながら住みつづける

これらの要素を実現する街を育てていくのが、「なりわい」を指標にした都市再生である。このような考え方は、持続可能な発展が目標になっている 21 世紀の都市像とも合致している。小田原の街には今もなお、千年間蓄積されてきた「なりわい」の要素(もの、人、店、自然)が数多く残っている。そこで街全体を、そうした要素を収める「蔵」に見立て、「千年蔵」と名づけたのである。



小田原駅南口にある案内図(上が南東、お堀端通りが南北軸)。市内には老舗が「街かど博物館」として多数存在していることが示されている。

### 3. 取り組みの体制

「特定非営利法人 小田原まちづくり応援団」(通称「まちえん」)が中心的な主体である。「まちえん」は行政とさまざまな市民活動とを結ぶ中間組織として 2003 年 6 月に設立された。

### 4. 具体策

#### (1) 体制の充実

##### ① 市民主体による構想・計画策定

市は基本構想を取りまとめるにあたり 1996 年 9 月に「総合計画百人委員会」を設置した。定員の倍近くの応募者の中から選ばれた委員により活発な議論が行われ、その成果は 1998 年に『ビジョン 21 おだわら 世界にきらめく「明日の 1000 年都市」』としてまとめられた。構想の後期基本計画を策定する際にも市は同様に「ビジョン21おだわら」市民提言会議(公募市民等 106 人を委員とする)を設置し、市民中心の計画づくりの体制を採った。

##### ② 「小田原市政策総合研究所」の設立

小田原市は市長の発案により、市の政策能力を高めるための研究所を設立することになった。そして、その研究所には後藤春彦早稲田大学教授の助言により市民研究員を置くことになった。研究所を単に市の政策のためのものと位置づけるのではなく、広く公共に開かれたものとする

が志向されたわけである。

こうして 2000 年 4 月に「小田原市政策総合研究所」が設立された。同研究所の体制は、所長、副所長、顧問各 1 名、上席研究員 3 名、主任研究員 3 名、副主任研究員 1 名、研究員 12 名、市民研究員 6 名という大規模なものとなった。主任研究員及び研究員は市の職員が占めたが、上席研究員及び副主任研究員はすべて外部からの経験豊富な学識経験者、専門家の登用であった。また、市民研究員の職業は、自由業、酒販店経営、喫茶業、大学院生、建築設計事務所経営、アパート経営と多彩なものとなった。このように、同研究所は市の殻に閉じこもらない外に広く開かれた真の意味での公共性の高いものとなった。このような体制の下でやがて「おだわら千年蔵構想」という大変優れた構想が策定されることになる(後述)。

### ③「特定非営利法人小田原まちづくり応援団」の発足

政策総合研究所の中には、市の組織の外にまちづくりのための研究所を設けることが必要であるとの認識が発足当初からあった。2001 年 5 月の「東海道小田原宿千年蔵構想」においても、「重点提案」のひとつとして、「市民、行政、企業の間を取り持ち、まちづくりのための「ひと、もの、まち」を総合的にプロデュースする組織」である「まちづくり研究所」の設立を提案している。

このような背景の下、後述する「おだわら千年蔵構想」の策定を契機に 2002 年に市と市民団体とを結ぶ中間支援組織を設置する実験が行われ、「小田原まちづくり応援団準備会」が設置された。これは小田原市との連携の下で行われ、そのプログラム「なりわい交流の再生による市街地の活性化 — まちづくりの中間支援組織の設立に向けた実証研究」は、国土交通省の「多様な主体の参加と連携による活力ある地域づくりモデル事業」(2002 年度)に指定された。

この準備会から 2003 年に「特定非営利活動法人小田原まちづくり応援団」(通称「まちえん」)が発足した(政策総合研究所のスタッフが外に出て独立する形で発足した)。「まちえん」は準備会段階から市と市民とを結ぶさまざまな活動を開始していたが、NPO 法人格を得たことで活動が一層広がりをみせることとなった。



「まちえん」の拠点、「まちえんカフェ」



## (2) まちづくりの理念の確立 - 「ビジョン 21 おだわら」と「おだわら千年蔵構想」

### ① 「ビジョン 21 おだわら」

小田原市が 1998 年度に策定した「ビジョン21おだわら」基本構想(目標年次 2010 年度)は、まちづくりの理念を「世界にきらめく「明日の 1000 年都市おだわら」とし、それを実現するためのキーワードを「交流」とした。そのシナリオは「人生の幅広い選択肢を提供し、人々の活発な交流を促すことによって都市を成長させる」というものであった。

基本構想では 1998 年度から 2010 年度までの 13 年間で前期 7 年間で後期 6 年間の 2 期に分け、それぞれの期間について基本計画を定めることとした。現在は 2005 年度から 2010 年度までの後期基本計画の時期に入っている。後期基本計画の策定は、そのために設置された「「ビジョン 21 おだわら」市民提言会議」(公募市民等 106 人を委員とする)が提言を取りまとめ、それを元に市が作成した計画案をさらに同会議が市と議論するというプロセスを経て行われた。市民提言会議の運営方法、会議のルール等も事前に公募市民による設立準備会により決定された。

後期基本計画では、基本構想のキーワードである「交流」の考え方をより鮮明に打ち出すことが重視された。すなわち、小田原の都市環境・生活環境の質を高めていくためには、さまざまな主体の参加と連携によって形成されてきた小田原の魅力を再生するとともに、小田原ならではの新たな付加価値を創造していく必要があると認識された。そして、新しいキーワードとして「おだわらルネッサンス・再生と創造」が打ち出され、豊かな自然や長い歴史に培われた伝統・文化に新しい価値を融合させ、「活力にあふれ、人にやさしく、まちなみが美しいまち」を目指すことが計画の基本的な視点であるとされた。

### ② 「おだわら千年蔵構想」

#### 1) 構想策定に至る経緯

小田原市政策総合研究所には「研究グループ」と「ワーキングチーム」とが置かれた。前者は学識経験者、市職員等の支援を受けつつ市民研究員が主体的に研究を行うものであり、後者は市職員、学識経験者等が市行政の横断的かつ重要な事項について専門的な政策研究を行うものである。前者は「旧東海道研究グループ」として発足した。これは、「旧東海道」は古くからの「交流の舞台」であり、小田原の原点はまさにその「旧東海道」にあるとの認識に基づくものである。そして、同グループの研究テーマは「交流の舞台・旧東海道周辺のまちづくり」とされた。

同グループは「街に出よう」を合言葉に活動し、まちの中に残るさまざまなものをまちづくりの資源として分類整理していった。そして 2000 年 11 月に中間報告「街かど博物館の輪を広げよう」をとりまとめた。同報告ではまちづくりの問題点を「まちづくり資源の演出不足」とし、「街かど博物館」の戦略的活用を提言した(「街かど博物館」とは市内の老舗を「博物館」と位置づけた小田原市の施策である)。そしてさらに議論を重ね、2001 年 5 月に最終報告「東海道小田原宿千年蔵」をとりまとめた。この構想は今日に至るまで市民組織のまちづくり理念の原点となっている。

#### 2) 「東海道小田原宿千年蔵構想」の策定

構想では、まず、まちづくりの理念を「千年蔵(ミレニアムアーカイヴ)」とした。小田原には多様な生活文化を生み出した「交流」の資産が、あたかも「蔵」の中の宝物のように豊富に残されているとの認識からである。「まちえん」常務理事の内藤英治氏は、この「千年蔵構想」の意義を「千年の間

に蓄積した「なりわい交流」を再度、掘り起こし、溜まった埃を掃い、時代へのマッチングという虫干しを行い、本物のストーリーで新たな都市を再生するまちづくり」とわかりやすく説明している。

構想では「交流」を、単なる観光ではなく、「日常とは違う何かに出会い、新たな価値の発見する行動」として意義付けた。そして、「交流のまちづくりの考え方」として「らしさ」が感じられるまちに」を提案した。この「らしさ」とは、歴史や文化が育んできた小田原独自のかけがえのない資産の価値を意味する。

構想は次いで「交流のまちづくりの視点」を「小田原らしさは多様なストーリーにあり」とした。その視点の中で「交流のテーマ」を、①なりわい、②粋・芸術、③まちをつつみこむ自然、④まちなみ、⑤公共施設の 5 つに整理した。「なりわい」とは「成る」プラス「這う」であり、自然→生産→販売→消費の流れ全体を捉える言葉である。それはすなわち「ものづくりを中心とした地場の産業」の姿であり、それを再生することを交流の根本的なテーマとして位置づけたのである。そして他の 4 つのテーマを「なりわい」と密接不可分のものとして設定した。また、「交流のテーマ」と並行して「交流のネットワーク」の仕掛けを、①まち歩き、②まちづくり、の 2 つに整理した。

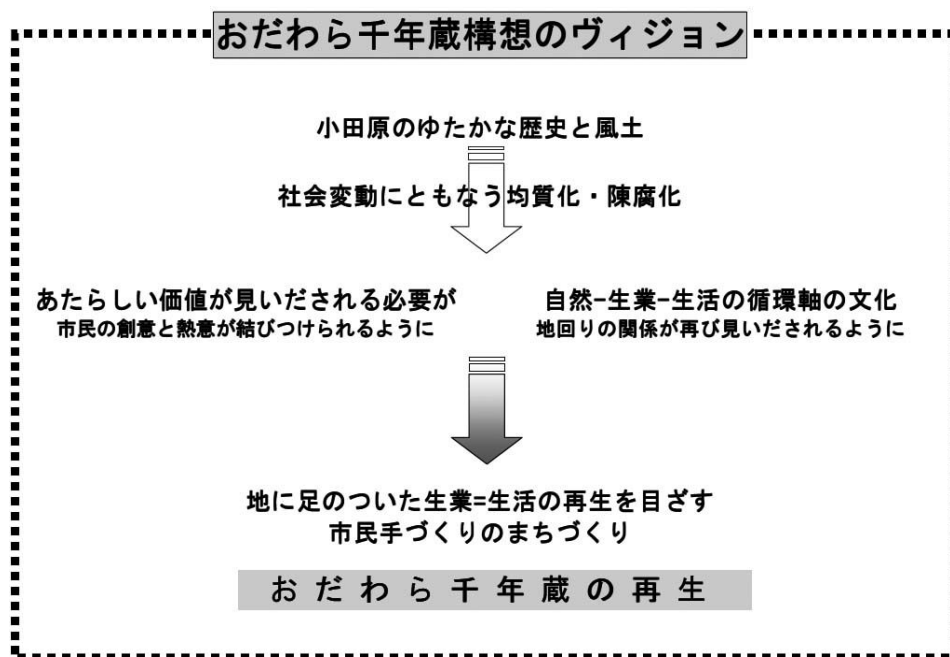
以上の理念に基づき、構想では 21 の「重点提案」を行っている。それらの中には、「なりわい交流館」の開設、「街かど博物館」の強化、「まちづくり研究所」の設置等、後に順次実現されていったものが含まれている。「街かど博物館」は、現在、梅干、蒲鉾、塩から、干物、薬、鯉節、寄木細工、木象嵌、和菓子、漆器、茶、陶器、呉服、豆腐など老舗の17館が指定されている。



「街かど博物館ガイドマップ」(小田原市発行)

### 3) 「おだわら千年蔵構想」の策定

上記「重点提案」の中の「まちづくり研究所」の設立を実現する目的で、「旧東海道研究グループ」の多くのメンバーから成る「市民ラボ」が発足した。市民ラボはまず「千年蔵構想」のブラッシュアップに着手し、公開討論会である「おだわら車座」を3回にわたり開催するなどして2002年5月に「おだわら千年蔵構想」を公表した。



同構想では、先の構想で提示した理念をより緻密化している。例えば「交流のテーマ」と「交流のネットワーク」とを組み合わせ「まちづくり資源」を分類し、資源再生の戦略性を明確にしている（下表参照）。そして、それらを展開する上で「中間支援組織」が必要であることを明確に打ち出した。また、《自然－生業－生活－自然の循環軸》に適合した交流のスタイルを、小田原の歴史的なさまざまな事実からモデルとして取り出した（「竹（ちく）再生プロジェクト」等）。

「おだわら千年蔵構想」は、2002年11月に「日本計画行政学会・計画賞」（第8回）を受賞した（この賞は民間・行政を問わず、すぐれたまちづくりの計画や実践に贈られるものである）。

交流のテーマとネットワーク

テーマ ネットワーク	なりわい	粋・芸術	自然	まちなみ	公共施設
まちづくり資源	生業や生活の達人たち	茶や華など別邸の文化遺産	松林や竹藪水路や海浜	出桁・蔵造商家格子戸や竹垣	商家や別邸の建築遺産
まち歩き	街かど博物館	登録文化財	保存樹・公園	こまちなみ条例	記念館など
まちづくり	なりわい歳時記	千年蔵ブランド	竹（地区）再生運動	町家活用運動	倶楽部組織

※「まちづくり資源」は代表的なものである。

### (3) 拠点施設の確保

#### ① 「なりわい交流館」の開設

小田原市には古い建築が数多く残っており、小田原市政策総合研究所では「東海道小田原宿千年蔵構想」において、これらの近代建築を活用してまち再生を図ることを提唱していたが、そうした折、「出桁(だしげた)造り」の旧網問屋の商家(昭和 7 年築)を「交流の拠点」として再生する話が飛び込んできた。この建物は、関東大震災で倒壊したため、旧所有者が 2 度と倒れない建物を築こうと、外部は和風商家、内部は木造キングポスト構法という珍しい建物で、最大スパンの漆喰壁の内部には鉄骨トラスまでが組み込まれている。本来、取り壊しが決まっていたが、このような旧東海道という地域のアイデンティティを形作ってきた歴史ある商家建築物をまちづくりに活かさないものかと、小沢良明市長の鶴の一声で保存が決まった建物である。

小田原市政策総合研究所では、旧東海道の中でも際立っていたこの建物の利活用案を検討し、付近にある「海のなりわい」の施設(干物店、かまぼこ店、鯉節店など)を案内する「なりわい交流の文化的拠点」にすることと宿場町小田原にふさわしい歴史ある商家建築物としてその独自の物語を説明する上で重要な建物であるという二つの意味を込め「小田原宿なりわい交流館」と名づけた。

2001 年 9 月、「小田原宿なりわい交流館」は、市民や観光客の憩いの場、地場産業の情報発信の拠点、生涯学習の場、市民活動の発表等各種イベントの会場として再出発した。1 階は海なりわい案内とお休み処、2 階はイベントスペースになっている。

なりわい交流館は小田原市所有の施設であり、その運営は市と地域住民とで構成される委員会によって行われている。また、市民組織「小田原やんべえ倶楽部」が、委員会と連携しながら、この商家で実際に行なわれていた歳時記を再現するイベントを実施し、小田原市の小田原ちようちん作成教室、小田原漆器作成教室など地域ブランドの体験学習の場としても活用されている。

#### ② 「まちえんカフェ」の開設

「小田原まちづくり応援団」ではまちづくり交流拠点として、「まちえんカフェ」を開設している。準備会に銀座通り商店街事務所の一角に、さらに正式発足後は約 2 年間、お堀端通りのハンバーガーショップを借りていたが、現在、向かいのファッションビル 2 階に独自のスペースを構え、広いイベントスペースをもったカフェ「**MACHIEN@CAFE**」を開いている。ここでは、毎月市民組織のネットワーク・ミーティング「まちえんカフェ」を開いているほか、まちづくり系の展覧会や車座などにスペースを提供、さらに「まちえんデスク」を置いて情報発信や相互交流の場として活用している。

### (4) 対話から相互交流の拡大

「まちえん」では、同年 7 月以来毎月(毎年 5 月を除く)、市民組織のネットワーク・ミーティング「まちえんカフェ」を開いている。メインとなるのは、参加者が持ちこむ街の課題を参加者全員で検討して解決策を練り上げる場である。課題の提供者は、一市民から行政の担当者まで多岐にわたり、市民相互の、また市民と行政のコミュニケーションを育てる貴重な機会になっている。

こうした実績を踏まえ 2004 年 7 月 7 日には、「小田原まちづくりフォーラム——こんなにある！市民と地域の底力」を開催した。ここには一人の市民から市民団体、さらに行政や専門家までが一同に介し、これからの小田原ならではのまちづくりについて議論を交わした。「まちえん」から「おだわら千年蔵構想」の報告が、市から「後期基本計画」の報告があった後、30 もの市民団体の代表

が壇上で討論会「まちえん車座」を行った。

このようなコミュニケーションを重ねることによって、「まちえん」がつなぎ手となるかたちで、さまざまなコラボレーションが育ってきている。2004 年度の中心市街地活性化フォーラム(経済産業省と小田原市、街かど博物館、公募アーティストとのコラボ)や酒蔵再生の社会実験(小田原の酒蔵をいかす蔵人の会の結成)、2005 年度の相模湾沿岸地域の魅力を高める構想づくりワークショップ(神奈川県とのコラボ)などである。

## (5) 具体的な事業の実施

### ① 「お店をオモシロクするアイデアコンペ」

2002 年度には、「まちえん」(準備会)では、中心市街地の商店街連合組織「ほっとファイブタウン」(中央通り・緑一番街・銀座通り・大工町・台宿の 5 商店街)と協力して、「お店をオモシロクするアイデアコンペ」を実施した。各商店街1店舗ずつ実際にリニューアルして効果を競いあうコンペである。県内外からプロアマ問わず約 60 の企画案が寄せられ、リニューアルに取り組んでもらった。イベントとして盛況だっただけでなく、街の雰囲気、そして何より商店街の人たちの意識を刺激することができた。最優秀賞に選ばれた銀座通りの荒物雑貨店「岩政」は、竹細工をメインにしたギャラリのような店構えに再生。おかみさんはその後も自ら店づくりに励んでいるだけでなく、リニューアルを手がけた大学生にも仕事が舞い込んだ。

### ② 小田原お堀端メインストリートプログラム

「まちえん」は、小田原らしい地域資源を活かし、歴史的景観、経済再生、防災などの視点からまちを包括的にプロモーションする「メインストリートプログラム」(小さな改善の連鎖による街並み整備事業)を進めている(2005 年度全国都市再生モデル調査の対象)。そのコンセプトは「街を行き交う人をいつも感動させる「デザインストリート」づくり」、事業ターゲットは「小田原大交流の創造」、キーワードは「歴史的文化的資産の利活用を背景とした経済再生」であり、それに沿って以下の 4 つの事業プログラムを展開している。

(注)「メインストリートプログラム」とは、アメリカで中心市街地の活性化に大きな成果を上げている都市再生の手法(約 1,900 地区で実施中)で、「歴史保存による経済再生」をキーワードに、地域のアイデンティティである歴史的建築物を生産的使用状態に戻し、地域のシンボルとして再生し、都市の本質から中心市街地を再生するまちづくりである。

#### 1) 幸田門プロジェクト

2005 年 7 月に「まち歩き調査」を実施した結果、お堀端メインストリートには、地域資源として小田原城の三の丸堀にあった「幸田口門跡とそれを取り囲む土塁」が歴史的な地域資源として残されていることがわかった。そこで「小田原やんべえ倶楽部」の主催に「まちえん」とお堀端通り商店街とが連携して 2005 年 10 月 15 日に「幸田門十三夜」を実施した。これは、オカリナ演奏、そば料理、飲み物付き(会費 2,000 円)のお月見の会である。



## 2) 酒蔵再生プロジェクト

東海大学サテライトキャンパスの社会実験チームと連携して取り組んでいる社会実験である。これまで「小田原最後の酒蔵再生・活用案発表会」(2005年7月、解体保存中の酒蔵の再生活用の提案)、「小田原活性化提案発表会」(2005年8月、西湘バイパスで閉ざされた海岸の活用等による中心市街地活性化策提案)、「小田原最後の酒蔵・再生展」(2005年10～11月、講座・展示)、酒蔵関係者による講座(2006年1月、2月、3月)、まちづくり方策案の展示発表・シンポジウム(2006年3月)を実施してきた。

## 3) デザインストリートコンペ

小田原市のメインストリートであるお堀端通り(小田原駅前通りから直線で約700m)の商店街を活性化する試みである。お堀端通りは駅前通りから幸田口門、お堀に至る歴史のある通りであることから、その個性ある歴史的景観を生かしつつ、それに新たな魅力を付加していくことで「個性ある商店街」を形成することが重要であるが、そのためには、「個性あるファサードデザイン」、「個性ある店主」、「個性あるモノ(商品)」を増やす長期的・段階的プログラムの導入が必要であると考えられた。それによって「なりわい通(つう)の店主」(小田原のうんちくを語れる店主)を増やし、小田原を支えたものづくりの文化「なりわい交流」によるまちづくりを実現しようというわけである。

このような問題意識を背景に、「なりわい交流」の店を数店舗増やす社会実験として「小田原デザインストリート2005 アートクラフト・デザイナーズ・コンペ」が2005年2月に実施された。これは、お堀端メインストリート沿いの商店16店舗の中にコーナーを設けてアートクラフトのデザイナーに出店してもらい、その売上等で商店街への貢献度を競うものである。アメリカでは商店街活性化の有力な方法として既に約1,900もの事例があるということであるが、日本での試みはこれが初めてであった。「アートクラフト商品」とは、世界にたったひとつだけの自作商品であり、コンペはそのオリジナル性にもこだわった。千年都市、小田原の歴史あるメインストリート・お堀端を背景としてどのような個性ある作品が生まれるかという点を重視したわけであり、これはある意味で芸術の試みでもあった。

出店は2月1日～24日の24日間とし、その後審査を行ったが、アートクラフト大賞は甲乙つけがたい2名になった(賞金50万円を折半した)。それは、それぞれがまったく異なった貢献をしていたからである。1名は「世界にひとつだけ「わたしのバッグ」」をつくって出店した(「ナック本館」に出店)。評価されたのは、「バックそのものの巧みなデザイン」、「お客様に説明する店主としての説得力の高さ」、「小田原を意識した作品ではないがアートクオリティーが高い作品のインパクトがいずれ街の活性化に寄与する」の諸点であった。もう1名は「トンボ玉」の製作実演・販売を行った(「織ゆう」に出店)。評価されたのは、「お堀に続く散歩道であるお堀端どおりの街にマッチングした「毎週末のトンボ球実演販売の実施」によって多くのお客様を集め販売に結びつけた」、「どこにでもあるトンボ玉であるが、期間中に来店した「織ゆう」のお客様が要求した新しい商品開発要望(和服小物、かんざし等)に応え、即日新商品として開発販売した素早い努力」の諸点であった。大賞のほか、アートクラフト準大賞も贈られるなど、全般的に個性と魅力あふれる出店が得られた(参加全16店の総売上(24日間)は3,320,130円であった)。

本コンペは商店街の人々の評価も高く、今後も実施を期待する声が多く出ている。アーティスト

が自ら説明して販売することの集客力は大きく、また、その周辺商店への波及効果も大きいことが確認されたのである。

#### 4) 水デザインプロジェクト

「まちえん」が 2005 年 7 月に地域資源を発見することを目的に開催した「まち歩き調査」の結果、お堀端メインストリートにはいくつかの使われている井戸が残されていることがわかった。また、「ナック小田原本館」は、井戸水が上水として利用されていることもわかった。

そのころ、小田原市内の水道管が破裂し、小田原市内の一部の地区で 1 週間も水道が止まるという事故が発生した。その際、板橋の豆腐屋さんの井戸水に多くの市民が集まるという光景が見られた。この事故は、市民として防災、景観、環境のことも考えながら、小田原の水を考え直す良い機会となった。そこで、「まちえん」は小田原の水を景観、防災、環境面から大切に活用するまちづくり事業として、「水プロジェクト」を立ち上げた。その第 1 弾として、8 月に「お堀端メインストリート打ち水大作戦」を実施した(3 トンほどの井戸水を店の人、会社員、通行人など約 200 名が打ち水した)。また、第 2 弾以降は、「井戸水を活用した防災、親水空間づくり事業」を検討している。

#### 5. 特徴的手法

市の構想・計画を策定する際に市民主体による議論の場を設けたり、市の研究機関に市民研究員を置いたりするなど、外に開かれた行政の姿勢に、外部から学識経験者、専門家、実務家等が呼応し、関係者が一体となってまちづくりに取り組んできていることが大きな特徴である。そして、そうしたプロセスから「まちえん」が生まれ、まちづくりが従来の行政主導のものから市民自らが構想し実践するものへと着実に移行してきている。

まちづくりの理念としては、《自然－生業－生活－自然の循環軸》に沿った「なりわい」をすべての活動の根本原理としている点が大きな特徴である。これは自然環境問題、社会問題、グローバリゼーション問題等、これからまちづくりが取り組んでいかなければならないさまざまな問題に対処するひとつの先進的な考え方として特段注目されるものである。

まちづくりの実践としては、まち歩き、社会実験等を地道に行った上で具体的な事業に結びつけるという地道で堅実な取り組みが高く評価される。

2005 年度にお堀端通りで実施された「メインストリートプログラム」は 2006 年度も同通りで実施されることが決まった。予算は神奈川県中小企業センター、まちづくり市民財団、街なか再生 NPO などの役割別負担であるが、県の予算は商店街自らが動いて確保したということであり、商店街の自発力が高まってきている。また、お堀端通りの隣の筋にあたる銀座通りでも 2006 年度からメインストリートプログラムを実施することが決まり、まちづくりの波及効果が確実に広がっている。

#### 6. 課題

今後さらに市民主体のまちづくりの推し進めるため、市民版シンクタンクの設定を構想する等、体制の一層の充実に向けた取り組みが行われている。

(引用・参考資料)

小田原市ホームページ

特定非営利法人小田原まちづくり応援団ホームページ

内藤英治「「おだわら千年蔵構想」による中心市街地の再生」(JIA Bulletin 2005 年 10 月号)

八甫谷邦明「小田原市民と協働するまちづくりシンクタンク」(『季刊まちづくり』2004 年 10 月号)

小田原市政策総合研究所『小田原スタディ』第 1 号(2001 年 5 月)